

## 若者の理工系離れについて



岸 清\*

最近の社会の激変ぶりには目を見張るばかりです。連立政権の誕生，景気低迷の長期化，コメ部分輸入の解禁等々，いずれをとっても直前まで全く想像もできなかった事態が展開しています。このような中であって，やや次元が異なるかもしれませんが，ちかごろ気になっている現象として，“若者の理工系離れ”，特に土木離れ現象があります。この傾向はそれほど急激ではありませんが，経済の成長とともに着実に増加してきたように思われます。

これを生活が豊かになると必然的に生ずる現象だとするなら，まことに憂慮すべき現象と言わねばなりません。問題があまりに複雑であり，その原因や，まして改善策など簡単には見いだせませんが，以下に私見を述べさせていただきます。

まず第一にあげられるのは，社会的ステータスの問題でしょう。相対的にみて難度が高く，苦勞が多い割に，社会的な評価がそれほど高くないとしたら，将来の生活に不安を感じていない若者が離れていくのは当然と言えるでしょう。これに関連して強烈な印象を受けたある事例を記したいと思います。それは1989年の北米カルフォルニアのロマプリエタ地震のときのテレビ報道番組でした。ロスアンジェルス2階建て高架橋が被災した事故に関連して，インタビューを受けた当該橋梁の設計技師が「当時の設計としては斬新で，規準にも合致していて全く問題はない。……」と，堂々と答えていたのです。

被災者に対するお詫び等はテレビ局側で削られたのかもしれませんが，それにしてもこれが日本であつたら，テレビで普通に放映されることすら考えられないことです。彼我の格差の大きさを思い知らされました。これはもう，社会的，歴史的あるいは民族的差異に根ざしているのかもしれませんが，したがって，その解決は一朝一夕には不可能なことでしょう。具体的な方策といっても，とても思いつきませんが，それぞれの分野で少しずつであっても地道な努力を重ねていくしかないと考えます。

次にあげられるのは，最近のハード軽視，ソフト重視の傾向です。国も個人も経済力が乏しい時代には，自然災害を受けるたびごとに防災対策の充実，社会基盤の整備が痛感され，また，手に入らない欲しいモノがたくさんある場合には，産業の振興が必要なことは議論の余地のない自明の理です。

最近の我が国の状況をみると，家電製品，自動車等の個人向け商品はほとんど飽和状態に達し，また，道路，鉄道等に対する欲求にも往時ほどの熱が感じられません。子供達は外で道具を使って遊ぶよりは，室内でテレビゲームに熱中しています。

たしかにハードがある程度充足し，それらと人々の関係が複雑になればなるほど，ソフトの重要さは

\* Kiyoshi KISHI : 本協会理事，東京電力（株）原子力本部副本部長

◇巻頭言◇

増加します。しかしハードあってのソフトであり、ソフトだけでは何の効用も得られないことは言うまでもありません。“バブル経済の崩壊”も、ソフト偏重が一因であったのかもしれませんが。

子供達が目の前にある施設やモノを水や空気と同様の、あって当然のものと考え、その重要さや先人の苦勞を知らないままに成長したとすれば、モノづくりに直接従事する技術者になりたいと思うはずがありません。これはどうしても教育に頼らざるを得ません。モノづくりの大切さ、重要さ、という従来は言わなくとも当然認識されていたことを意識的に教育の中に組み入れる必要があります。

例えば関連する学協会が、各年代に対応した副読本を作ることも有意義ではないかと思えます。

最後にとりあげたいことは、いわゆる環境問題に対する現在の風潮についてです。“自然にやさしい”“地球にやさしい”が現在最も格好良い標語としてもてはやされ、環境保全、自然保護は疑問の余地のない善であるとされています。これから、自然を開発する行為は悪のイメージが定着します。善悪二元論は単純なため世に受け入れ易いのですが、問題がそれほど単純ならば、初めから問題になるはずはありません。

だいぶ以前から、いわゆる“マツクイムシ論争”と呼ばれる論議が行われてきました。これは、マツの美林を守るために、薬品を空中散布すると、昆虫も、それを餌にする鳥も住めなくなる、さてどうすべきか、というのがテーマです。松が枯れるのも自然の営みの一部だと考えれば、自然保護とは、松は枯れても良いことになります。この論争は同じ生物学の中で行われたものですが、論争としてはまだ決着がついておりません。

地球の一部を改変して構造物を造ることも、松林を守ることも、いずれも人間にとって望ましい形にしていこうとする行為です。その行為の結果として、自然環境に、あるいは社会環境に、何らかの変化がもたらされる。したがって、問題はまず、「行為の目的は真に望ましいものであるか」であり、次に、「その結果予想される変化は十分許容される範囲に入るか」ということになります。

開発の目的そのものに問題があるケースはそれほどないと思いますが、後者の、いわゆる影響の評価については、対象が自然、生物、社会と極めて広範かつ複雑であるため、影響予想の精度が不十分な事例があって、それが批判されたケースもあったと思えます。

現在の風潮は、特にマスコミ界を先頭に、前述した「自然保護は善、開発行為は悪」あるいは、「国・大企業対一般市民」のイメージに乗って、大半の開発行為は人々にとって望ましい姿で実現していることには触れず、単に一般市民が反対しているので報道する、というケースが多いのが実態ではないでしょうか。

我が国マスコミのこのような体質は他の面でも様々な問題を生じていますが、これ以上言及しません。ここでも前述のソフト・ハード論議と同様、次代を担う子供達に対する教育が重要であると思えます。教育の場で、自然、生物の大切さのみが強調され、これに対する人間の営為はマイナス・イメージで語られるとしたら、マスコミの体質を拡大再生産することになります。

自然界は、生物が喰い喰われる複雑な食物連鎖を通じて変化しつつあることは生態学の基本であり、その中に人間が共存していることを知らせなければなりません。

我々建設に関係する技術者も、開発に伴うマイナスの影響を最小にする努力はもちろんですが、間違っても上記の風潮にくみすることのないようにしなければならぬのでしょう。

前述のハードの大切さと同様に開発の効用について、あまりに当り前であるがゆえに語られることが少ないと思われるので、もっと一般の人達に、子供に伝える工夫と努力が必要と考えられます。